

古典虎の巻 ～歴史的仮名遣いの読み方～

★その一 歴史的仮名遣いの読み方 ルール確認

- ① 語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に変える。
 ・にはかに↓にわかに ・いにしへ↓いにしえ ③ あはれに **あわれに** ()
- ② 「ゐ・ゑ・を」は「い・え・お」に変える。
 ・みたり↓いたり ・をかし↓おかし ④ こゑ **こえ** ()
- ③ 「ぢ・づ」は「じ・ず」に変える。
 ・なんぢ↓なんじ ・よろづ↓よろず ⑤ いづれ **いづれ** ()
- ④ 「ゝむ」は「ん」に変える。
 ・行かむ↓行かん ⑥ とらむ **とらん** ()
- ⑤ 「くわ」は「か」、「ぐわ」は「が」に変える。
 ・くわじ↓かじ ・にんぐわつ↓にんがつ ⑦ かいせんせい **かいせんせい** ()
- ⑥ 「au」「iu」「eu」の母音は「ô」「yû」「yô」に変える。
 ・やうやう↓ようよう ・あやしう↓あやしゆう ・けふ↓きよう ⑧ けふ **きよう** ()
- ⑨ かふしちうがつかう↓() **かうしちゆうがつかう** () ※「じ」「や」「ぢ」「ち」は小さく「じ」「や」「ぢ」「よ」に
 することもあります。

★その二 二十問チャレンジ

- ① まうす () **もうす** () ② ぢごく () **じごく** ()
- ③ ゐなか () **いなか** () ④ やむごとなし () **やんごとなし** ()
- ⑤ きうしう () **きゆうしゆう** () ⑥ くわかく () **かかく** ()
- ⑦ ゆゑ () **ゆえ** () ⑧ わざはひ () **わざわい** ()
- ⑨ あふぎ () **おうぎ** () ⑩ けふ () **きよう** ()

★その三 文中の歴史的仮名遣いをひらがなで現代仮名遣いになおそう！

- ① 梅はにほひあれども、色ことならず。 () **におい** ()
- ② 祈り直し侍りと言へり。 () **いえり** ()
- ③ ただ一人、徒歩より詣でけり。 () **もうで** ()
- ④ 若き女のなんとも物をばいはずして () **いわず** ()
- ⑤ 世をうぢ山と人はいふなり () **うじやま** ()

今回は、皆さんが知っているの昔話の中から、「浦島太郎」を古文で読んでみましょう。実は浦島太郎は室町時代に成立した『御伽草子』の中に登場しているのです。「昔話」と言いますが、本当に遙か昔の作品なのですね。今回学習した歴史的仮名遣いの読み方を使って、「浦島太郎」を読んでみましょう。()の中には傍線部の言葉を現代仮名遣いに直したものをひらがなで書きましょう。

(いう)

昔丹後国に、浦島といふもの侍りに、その子

に浦島太郎と申して、年の齡二十四五の男有りけ

(うろくず) (やしない)

り。明け暮れ海の※うろくづをとりて、父母を養ひ

(せん)

けるが、ある日のつれづれに、釣をせむとて出で

にけり。浦々島々、入江々々、至らぬ所もなく、

(ひろい)

釣をし、貝を拾ひ、※みるめを刈りなどしける所

(えしまがいそ)

に、※えしまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げ

(いっよう)

ける。浦島太郎此亀にいふやう、「汝、生有るもの

の中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきも

(いたわしけ)

のなり。忽ちここにて命をたたん事、いたはしけ

れば (おもいだす)

れば、助くるなり。常には此恩を思ひ出すべし」

(かえし)

とて此亀をもとの海にかへしける。

※うろくず…魚のこと。 ※みるめ…海藻の名前。

※えしまが磯…絵島ヶ磯。磯の名前。

昔丹後の国に、浦島という者がおり、その人の子どもに浦島太郎と申す、二十四、五歳の男がいた。朝から晩まで海の魚を取って、父母を養っていたが、ある日の退屈なときに、釣りをしようと出かけた。あちらこちらの浦や島、入江などの隅々まで、釣りをし、貝を拾い、みるめを刈っているときに、絵島ヶ磯というところで、亀を一匹釣り上げた。浦島太郎が、この亀に言うには、「命があるものの中でも、鶴は千年、亀は万年といって、命が長いものだ。すぐさまここで命を絶つことは、かわいそうなので、助けよう。いつもこの恩を忘れないでおくれ。」と言ってこの亀を海に返した。

どうやら、古典作品の浦島太郎と私たちが知っている浦島太郎は、少しストーリーが違ふようですね。続きはまた今度！